

マレーシアにおける分野融合的研究の可能性

石川 登

2010年から文科省の科学研究費を受けて三十余名の研究者とサラワク州でアブラヤシ・プランテーションに関する調査プロジェクトを続けている(<http://biomassociety.org/>)。調査地はビンツル省を流れる二つの河川、クムナ川とタタウ川を中心に形成される流域社会である。2011年に出された統計によればビンツル省の地表は既にその57パーセントがアブラヤシとアカシア・マンギュームのプランテーションに転換されており、現在もいわゆる **planted forests** は急速に拡大している。私たちは、研究分野の壁を超えた様々な専門家と協力しあうことによって、広大な森林とプランテーションの広がる流域社会の変化を記録し、分析している。調査に参加している研究者の学問的バックグラウンドは実に多様である。現在、文化人類学、人文地理学、自然地理学、自然資源管理、農業経済学、歴史学、グローバルヒストリー、東南アジア地域研究、政治生態学、天然資源経済学、森林社会学、森林生態系生態学、森林生態保全学、鳥類生態学、動物生態学、植物生態学、農学、水門学、河川生態学、ライフサイクル・アセスメント等を専門とするフィールドワーカーが参加している。

私たちが現地で行っていることは、アブラヤシ・プランテーションを流れ出る河川の水質調査であったり、プランテーションや伐採コンセッション内外のイノシシやマメジカの動きを記録するカメラ・トラップの設置であったり、アブラヤシ栽培農家での聞き取りであったり、地道なデータ収集が中心となる。しかしながら、皆がいくつかの大きな問いへの答えを探している。それは、高いバイオマスをもつ熱帯社会の「地域益」とグローバルな「公／共益」の共存の作法は何かを知ること、さらにはコーポレートな資源利用システムと在地の生態系保全の併存の方法である。このような問いを流域社会に張りついて考えようというわけである。

プランテーション開発が集中する熱帯地域は、地球における水・熱循環の高い駆動力を持つ地域であり、最も高いバイオマスを有する地域でもある。このような熱帯の生態系と地域社会の生存基盤の確保は、地球レベルの全体環境と人類の生存基盤の確保をも意味する。私たちは眼前で進行するプランテーションの拡大を無視した静態的な社会生態モデルを提示することに興味をもちあわせていない。私たちが目指すのは、プランテーションを所与のものとしながら、生態保全と開発の接合面を探ることであり、熱帯の土地・森林開発と環境依存型経済の維持をトレードオフ関係とみなす前提を超えることにより、人々と動植物の生存基盤維持の方法を模索中である。社会的にも生態的にも持続可能で、グローバル市場経済のみならず、ローカルなコミュニティにおいても、熱帯の生存基盤が確保されるような「プランテーション型熱帯バイオマス社会」を構想し、解決の糸口をみいだすことが目標である。

私たちの調査は、分野横断的な性格に加えて、いくつか「マルチ」な性格を持っている。第一は流域社会を分析対象とすることによる多元的な状況である。最上流から河口にいたる空間に形成されているビンツルの流域社会では、サラワクの大多数の民族集団が存在し、いきおい調査はマルチ・エスニックな性格を帯び

る。流域ランドスケープで調査を行う生態学者たちも同様に、多様な植生(低地・丘陵フタバガキ林、泥炭湿地林、焼畑二次林、アカシア人工林、アブラヤシ・プランテーション)と土地利用形態(択伐コンセッション、アカシア・アブラヤシ・プランテーション、焼畑休閑林、耕地)を対象に調査を続けている。従来の実験プロットや単一の民族集団やコミュニティでの調査とは異なる複合的なランドスケープやエスニシティを対象とする私たちの調査は、さらにその研究対象を人間以外にも広げている。従来の社会科学のもつ anthropocentric (人間中心的)な性格を超えて、動植物、地形、物質循環などを考察しながらプランテーションに関わる「森羅万象」を考えたいのである。文化人類学では、人間以外の種を含めた multi-species 研究の可能性が議論されているが、実際のフィールドでの文理の協業や融合の試みは紙の上の議論よりもはるかに面白い。

プロジェクト・リーダーとして一つ自負していることがある。このような分野融合的なプロジェクトを現在マレーシアで行えるのはおそらく日本の研究者だけではないだろうか、ということだ。これはひとえに日本におけるマレーシア研究の厚みによる。サラワク州に限っても、現在調査を行っている社会科学系と自然科学系研究者の数は(もちろんマレーシア人を除けば)日本人が突出している。文化人類学者に加えて、多くの生態学者はマレー語のみならイバン語、クニャ語、プナン語まで繰って調査を行う。これらの研究者は、さらにカリマンタンやスマトラで調査を行うインドネシア組の参加を時に受けながら、地元の人々との密なコミュニケーションに根ざしたデータ収集を行っている。

この数年、通分野的な共同調査をしていて強く感じていることがある。それは、専門分野を架橋したネットワークのありがたみである。自分の調査で何か疑問を持ったとき、歴史、経済、文化、政治、生態、地形、水文、気象など、さまざまな疑問に答えてくれる同僚がいることは本当にありがたい。研究の地域を同じくし、調査している場所の空気、言葉、食べ物などを共有し、かつ自分の知らない専門知識をもった学問上の知人は何にもかえられない財産となる。

マレーシア研究の進化、深化、複雑化、ならびに私たちの研究視点の拡大を前にして、マレーシアの *tanah air* をよりホーリスティックに考察する必要が高まっている。このために日本マレーシア学会(JAMS)が研究分野を超えた知識のリポジトリとなることに期待したい。上述したように、特に、自然系の会員の参加も得て、文理の壁をも超えた知識の互酬的交換を可能とする緩やかなネットワークづくりができれば素晴らしいと思う。